

平成 26 年度事業報告

自 平成 26 年 4 月 1 日

至 平成 27 年 3 月 31 日

【 概要 】

日本文藝家協会は、平成 23 年 4 月 1 日から公益社団法人となって 4 年の活動が過ぎた。この間、財務を見直し赤字予算から実質予算に変え、また事業別のコスト削減を図ってきた。現在は月次報告のできる財務管理体制となり、4 期続けて黒字となる見通しである。今期はこの財政的体力の維持につとめ、さらに新たな公益事業の展開のための調査と研究を課題に据えて活動をおこなった。また平成 28 年度に迎える協会 90 周年にあたっては各委員会と連携し、文芸文化・出版文化の将来的な展望を見据えた事業の実現に向けて取り組んできた。各事業の報告は次の通り。

公益事業 1 普及事業

1 講演会等事業

1) 文芸および著作権に関するイベント

平成 23 年に開始した文芸トークサロン〈しゃべりたい、話したい〉は、平成 26 年度は全 10 回実施し通算 32 回を超える催しとなった。今期は昨年以上に協会の理事・会員作家たちにご登壇いただき、参加者からは作家の創作視点や日常の関心分野を垣間見ることができたとの感想が寄せられた。実作者と直接ふれあえる協会ならではのイベントとして継続していきたい。

【第 24 回】4 月 18 日 “小説家として生きてきて”

ゲスト 黒井千次（作家）

【第 25 回】6 月 20 日 “文芸出版の未来を考える” 電子書籍と T P P

ゲスト 三田誠広（作家） 久保田 裕（コンピュータソフトウェア著作権協会）

【第 26 回】7 月 4 日 “文学の風景” 東北から見える日本・ポローニャから見える東北

ゲスト 山本陽史（山形大学教授）

【第 27 回】8 月 29 日 “文学とアンチ・レイシズム” II あれから 1 年

ゲスト 桜井信栄（南ソウル大学准教授） 中沢けい（作家）

【第 28 回】9 月 26 日 “時代小説と江戸ことば”

ゲスト 竹田真砂子（作家・エッセイスト）

【第 29 回】10 月 27 日 “吉田健一伝を書き上げて”

ゲスト 長谷川郁夫（文芸評論家）

【第 30 回】11 月 28 日 “神社から見たこの国の文化と歴史”

ゲスト 佐藤洋二郎（作家）

【第 31 回】1 月 30 日 “目でみることば”

ゲスト 岡部 隆（作家・編集者）

【第 32 回】3 月 13 日 “歴伝を読もう！”

ゲスト 岳 真也（作家）塚本青史（作家）嵯峨野 晶（作家）

また第 29 回の“吉田健一伝を書き上げて”は、10 月 27 日に拡大版として東京堂書店・東京堂ホールで実施し、本のまち神保町で吉田健一ファンや縁のある編集者らの集いとなり盛況であった。続く 10 月 31 日にも、協会の新規編纂事業である「現代小説クロニクル」（講談社刊・全 8 巻）の発刊記念イベントを同じ東京堂ホールにて開催。進行役に永江 朗（作家）、ゲストに川村 湊編纂委員長、中上 紀（作家）、三田誠広（作家）の各氏を迎え、文芸書店との提携で現代小説の 40 年を振り返る企画の趣旨にふさわしい内容となった。

講演会事業は前期に比べより活発な活動をおこなったが、その分事務局の人的負担も多くなり来期の課題である。

2) 文学碑公苑・講演会

第 14 回となる、富士霊園内の〈文学碑公苑〉での秋の講演会は 9 月 25 日に開催。事務局員 6 名、貸切バスで一般文学ファン 44 名と富士霊園に赴く。演題は「私の『文学』とおき話」、講師は作家・津村節子氏。聴き手は作家・古書店店主、出久根達郎氏。献花と昼食のあと講演会、そしてバスにて近郊の「井上靖文学館」を訪問し帰路というコース。移動のバス内での文学館の紹介 DVD の鑑賞と学芸員のレクチャーが好評であった。

3) 著作権思想普及セミナー支援

文化庁主催のセミナーに資料を送付、講師派遣の案内を文化庁、教育委員会、商工会議所などに送っている。今期は、著作権教育連絡協議会、児童文芸家協会主催の著作権勉強会等に多く出向いて情報を収集し、これをもとに協会ならではの著作権思想普及のためのセミナーのプログラムの作成と支援パッケージを研究、来期につなげたい。

2 データベース事業

協会会員の名簿等データを毎月更新。ホームページの「イベント」欄でトークサロン、講演会等の協会活動情報、「編纂物」欄では、平成 26 年度発行の協会編纂物の告知、また声明文・要望として「児童ポルノ禁止法改定案についての声明」、「入試問題に関する要望書」、「後藤健二氏の速やかな釈放を求める」等それぞれ発信した。また、コンテンツ・ポータルサイト運営協議会に参加して、ポータルサイト「JAPACON（ジャパコン）」による海外に向けての日本のコンテンツの発信に協力した。会員・著作権データの管理システム「K101」では、4 月の消費税改正に伴う変更をおこない、今期、完全移行された支払データを通して、1 月には著作権委託者への支払調書を発行できた。

3 編纂事業

1) 文藝年鑑の発行

「文藝年鑑 2014」を新潮社より発刊。編纂委員会において、文芸「概観」の分野別の見直しや執筆者の選定について協議をし、それを踏まえて編成や目次立てを改変した。また「雑誌掲載作品目録」の項目整理に工夫を加えた。完全データ入稿に移行して 3 年目の今期は入力・デザインともに作業の能率化がすすんだ。図書館などへのあらたな販路の拡大を図る具体的な方策が、今後の課題である。

2) 文芸アンソロジーの発刊

以下の年次刊行物を編纂し刊行した。

「文学 2014」4月22日 講談社発行 定価3,300円(税別 以下同)

編纂委員 川村 湊 島田雅彦 富岡幸一郎 中沢けい 沼野充義

「平成二十六年 代表作時代小説」6月20日 光文社発行 定価2,300円

編纂委員 川村 湊 安西篤子 末國善己 竹田真砂子 縄田一男

「短篇ベストコレクション 現代の小説 2014」6月15日 徳間書店発行 定価700円

編纂委員 川村 湊 清原康正 長谷部史親 森下一仁

「ベストエッセイ 2014」6月15日 光村図書発行 定価2,000円

編纂委員 川村 湊 角田光代 林 真理子 藤沢 周 町田 康 三浦しをん

10月より新規に「現代小説クロニクル 全8巻」刊行開始。

編纂委員 川村 湊 佐伯一麦 永江 朗 林 真理子 湯川 豊

「現代小説クロニクル 1975～1979」10月10日 講談社発行 定価1,700円

「現代小説クロニクル 1980～1984」12月10日 講談社発行 定価1,700円

「現代小説クロニクル 1985～1989」2月10日 講談社発行 定価1,700円

発刊記念として11月に東京堂書店と提携し東京堂ホールにて特別イベントを開催した。「時代小説」アンソロジーは今期は休刊となり、あらたな版元候補と交渉の結果、集英社に決定、企画立案中である。

4 文学モニュメント運営事業

これまでの管理業者からあらたに、東日本開発と公苑内の管理契約を締結して、年間を通しての植栽、除草等の計画的な保全に着手した。

「文学者之墓」墓前祭は10月2日、千駄ヶ谷発の貸切バス2台で遺族らと事務局員共に富士霊園へ。文学者支援委員会から出久根達郎委員長、山田隆昭副委員長らが出席。合わせて205名が参列した。本年の新規刻字は生前手続きを含め30名、計799名の墓碑となった。「文学者之墓」の中長期的な運営の在り方をまとめるために12月に会員によるアンケートを実施、結果を受けて理事会で協議し来期の構想につなげていく。

5 文芸家協会ニュース発刊事業

協会ニュースはNo.742 4月号～No.751 3月号まで、例年と同じく2月・8月を除き年10回発行して理事会報告、事業報告、著作権広報活動等について情報を提供開示した。また5月号には「総会資料」、7月号には「第3回巡回イベント大阪 報告」、11月号には小冊子「男性向けカタログ誌の著作権侵害事案〈調査報告〉どう作成され、どう改変されたのか」、1月号には「第4回巡回イベント 北九州市 報告」と「税のお知らせ」をそれぞれ制作し、付録として各月の協会ニュースに同封し、配布した。

6 障害者等支援事業

全国の社会福祉団体等の求めに応じて、障害者等の支援を目的とした「拡大写本」、「録音図書」等に利用する著作物に関し無償で許諾事業をおこなった。ボランティア団体、日本障害者リハビリテーション協会、図書館協議会、など各方面が主催する講演会、勉強会等に出向き、協会としての支援事業の立案のための調査研究をすすめた。

公益事業2 著作権管理事業

1 著作権管理事業

著作権管理部の二次利用の許諾事業による管理手数料の柱であった映画、テレビ等映像化原作部門に係る事業収入はほぼ前年度並みで推移したが、収支差額としては黒字になる見込みである。著作権者への一部ファクシミリと電子メールによる「許諾伺い」は著作権者、申請者ともに好評である。今年も新年賀詞交歓会を1月9日に都市センターホールで開催。賛助会員、著作権関係団体や実務担当者らと理事らとの貴重な交流の場となった。

著作権思想の普及活動、そして地方会員との交流を図るため各都市を回る「文藝巡回イベント」は、以下のように今期は3回開催することができた。

【第3回】6月14日“文学は消えてゆくか？”大阪市中央公会堂にて ゲスト 内田 樹（神戸女学院大教授）山崎正和（劇作家・評論家）三田誠広（作家・協会副理事長）進行 関川夏央（作家・協会常務理事）

【第4回】12月4日“介護と文学 高齢化、人口減少、消えつつある読書群と文学”北九州市立商工貿易会館にて ゲスト 伊藤比呂美（詩人）岡野雄一（漫画家）平川克美（事業家・文筆家）進行 関川夏央（作家・協会常務理事）

【第5回】2月2日、“公共図書館はほんとうに本の敵？ 図書館・書店・作家・出版社が共生する「活字文化」の未来を考える”東京・紀伊國屋サザンシアターにて ゲスト 猪谷千香（ジャーナリスト）佐藤 優（作家・元外務省主任分析官）林 真理子（作家・協会常務理事）根本 彰（東京大学大学院図書館情報学教授）菊池明郎（筑摩書房前会長）石井 昂（新潮社常務取締役）進行 植村八潮（専修大学教授）

2 補償金等受け取りおよび分配事業

これまで協会の分配事業の母体のひとつであった一般社団法人 私的録画補償金管理協会（SARVH）は、平成24年11月に株式会社東芝との補償金をめぐる裁判で最終的な司法判断が確定し、事実上、私的録画補償金制度は機能しなくなった。これを受けてSARVHは、平成25年度、26年度と2年間に限り共通目的事業を中心とした事業を継続してきたが、平成27年3月末に業務の廃止を届け出ることとなった。なお、最後となった平成24年度までの補償金についての委託者への分配はすべて完了している。

私的録音補償金管理協会（SARAH）と教科書補償金等については、これまで通り管理委託者への分配事業を継続しているが、SARAHについては、平成24年度分が平成26年3月に入金され、委託者への分配が終了しているものの、平成25年度の補償金分配が延期されている。これはJEITA（電子情報技術産業協会）経由のメーカー5社が補償金の単価を独自に変更したため、再分配の煩雑化を避けるため分配は延期されたままである。教科書等補償金は、平成26年度6月から7月にかけて各教科書会社へ請求。平成25年度分（3割相当）と平成26年度分（7割相当）の委託者へ分配が終了している。複写使用料も平成24年度、平成25年度分ともに委託者へ分配されている。

公益事業3 調査研究事業

1 広報・提案事業

文化庁「文化審議会著作権分科会」に永江 朗理事、経済産業省「出版物の流通促進に向けた契約の在り方に関する検討会」に中沢けい理事が専任で出席し、協会の立場と

公益活動の広報につとめた。協会としての声明・意見・要望書等を発信して著作権思想の啓蒙、著作物の利用促進の周知を図った。10月に著作権侵害の実例報告として「男性向けカタログ雑誌の著作権侵害事案〈調査報告〉—どう作成され、どう改変されたか—」と題した小冊子を制作、会員、著作権関係団体等に配布した。

2 「著作権評価に関する意見書」作成事業

今期も著作権継承者の要請に応じて、文芸作品の「著作権評価に関する意見書（評価意見書）」を作成して公正な著作権の評価をおこなった。協会の調査、作成に関しては税務署の信任を得ているもので近年はとくに要請件数が増加する傾向にある。著作物全般に関して総合的な精査と意見を求められる作業であり、協会事業としてさらに評価されるよう研鑽を図っていきたい。

3 連絡仲介事業

年間を通して官公庁、関連団体、出版者、一般からのさまざまな著作物利用の問合せや依頼に対し、調査をして仲介活動をして円滑な著作物利用のために協力をおこなった。大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所からの「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に公開目的のサンプルデータ提供の依頼を受けて連絡仲介をおこない、その収益を協会から日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会、日本推理作家協会、日本ペンクラブの各団体へ送金分配した。

協会会議室の提供・貸出を呼びかけ「21世紀の出版契約を考える会」、「Myブック協議会」、「脱原発を考える作家の会」、「吉里吉里忌(井上ひさし氏を偲ぶ会) 実行委員会」等の委員会や記者会見場として提供した。また協会が著作物の利活用の仲介だけでなく、文芸家の総合窓口として適切な対応をするために職員のセミナー参加を薦めた。結果、内閣府主催の「公益法人の財務管理セミナー」、「寄付金集め入門セミナー」、「TPP交渉に関する説明会」はじめ「障害者のための電子図書福祉の会」（日本書籍出版協会）、「出版・著作権等管理販売研究会」などに積極的に参加した。

以上